

# 波

兵庫医療大学薬学部医療薬学科教授

青木 俊二さん①

見出しを読まれて、不思議に思われた方も多いのではないだろうか。「海の中に『くすり』があるの?」という疑問は至極もつともである。答えは「Yes」。海洋生物には、非常に興味深い物質を持っているものが数多く存在し、海洋生物から薬品として利用できる物質を探す研究が現在、非常に注目されている。

## 海の「くすり」

生薬・漢方薬を例に挙げるまでもなく、陸上の動植物は「くすり」として使われてきた歴史も長く、有効成分がわかっているものも多い。一方、海洋生物は、膨大な数の生物種が存在するにもかかわらず、魚介類や海藻がもっぱら食用として利用されてきただけである。

しかしながら、スキューバダイビングなどの技術の発達によって以前

## 潜って採取 抗がん剤や水虫薬に



あおき・しゅんじ



64年、大阪府生まれ。92年京都薬科大学博士前期課程修了、同年大阪大学薬学研究科博士後期課程入学。93年同博士後期課程中退後、大阪大学薬学研究科天然物化学分野助手。03年同講師を経て07年より現職。専門は天然薬物学。

よりも海洋生物の採集が簡単になり、カイメンやホヤといったあまり進化していない下等な海生動物が、近年、研究対象になっていく。実際に医薬品などに使われている海洋生物由来の成分について紹介しよう。古いものでは、海藻の一種マクリに含まれるカイニン酸が有名である。これは虫下し（駆虫薬）として今も用いられている。最近では、ホヤから発見されたエクティナサイジン743が抗がん剤として認可されている。現在臨床で使われている抗がん剤シタラビンは、海綿由来の

物質スポンゴウリジンの発見なくしては開発されなかったはずだ。私が前に所属していた大阪大学薬学研究科では、食用となっているマナマコII写真IIからホロトキシニンAという化合物を発見した。この物質が水虫の原因となる真菌（俗に言うカビですね）の生育を妨げることから、水虫薬として市販されている。また、サメから発見されたスクアラミンは、従来とは異なる作用を持った抗がん剤として期待され、現在、研究が精力的に行われている。海から「くすり」を探すことが、荒唐無稽なことではないことをお分かりいただけただろうか。